

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	書陵部蔵『新撰字鏡』天治元年写本の原本と複製本
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	論叢 国語教育学, 20 : 23 - 32
Issue Date	2024-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55340
URL	https://doi.org/10.15027/55340
Right	
Relation	



書陵部蔵『新撰字鏡』天治元年写本の原本と複製本

佐々木 勇

〇、本稿の目的

現存最古の漢和辞典として知られる『新撰字鏡』は、「倭云加奈戸」(21-4才7)(1)「和云比加利豆留」(22-4ウ1)等の和訓を掲載することから、『日本国語大辞典第二版』(小学館)に一三五八例、『角川古語大辞典』(角川書店)にも六一一例引用されている(ジャパンナレッジの「用例(全体)」と「用例(出典情報)」検索とに依る)。

『新撰字鏡』として利用されるのは、現時点では、天治元年(一一二四)写本が主である。その原本は、宮内庁書陵部に所蔵されている(559函28架)。この天治本『新撰字鏡』は、繰り返し書写され、その書写本が各地に保管されている(国書データベース、参照)。複製本も、五度、刊行された。

本稿の目的は、『新撰字鏡』現存最古の天治元年写本原本とその複製本との相違点を明示し、日本語史・日本文化史・『切韻』・『玉篇』・『一切経音義』等の研究に本書を活用する際の注意を喚起することである。

一、天治本『新撰字鏡』の原本と複製本

1. 天治本『新撰字鏡』の原本

書陵部蔵天治本『新撰字鏡』は、その全頁画像を、国書データベースで見ることができる。

DOI <https://doi.org/10.20730/100290337> 著作ID 4568

統一書名 新撰字鏡(しんせんじぎょう)(Shinsenjikyō)

現在の公開画像は、平成十三年(二〇〇一)に巻第一・三・五・九・十一・十二、同十五年(二〇〇三)に巻第二・四・十が撮影されたものである(2)。巻第二・四・十は見開きで、他巻は一頁ずつ撮影されている。一方、現在の複製本が基づく写真は、一九一六年以前に撮影されたものであるから、国書データベース公開画像はその写真とは異なる。そのため、両者に見え方の違いが生じている。

二〇〇一年・二〇〇三年に撮影された写真の国書データベースにおける公開は、二〇二一年三月十八日〜二十二日の間である(3)。また、二〇〇三年の写真撮影後、天治本『新撰字鏡』原本は、修理されている(4)。

池田証壽・李媛「天治本新撰字鏡全文テキスト構築の方法と課題」(『人文科学とコンピュータシンポジウム』二〇一七年十二月)は、「現在、利用できる複製本は旧複製と新複製の二種類である。旧複製は1916年刊行の複製本とその再複製であり、広く利用されている。新複製は宮内庁書陵部で閲覧・入手が可能な最新の写真版である。この

新複製によって旧複製で不鮮明な箇所が明瞭に判読できるようになった。また逆に、欠損箇所が修理状況によって、字画が判読しにくくなる場合もある。したがって、旧複製と新複製とを見比べて本文内容を確認する必要がある。(40頁右)とする(原文横書き)。

公開画像(右引用では「新複製」でも不明の場合、所蔵者である宮内庁書陵部に原本閲覧の必要性を理解して頂ければ、原本を閲覧することができ(本稿の筆者は、原本を拝見した)。

2. 天治本『新撰字鏡』の複製本

公刊された複製本に、以下のものがある。

1. 一九一六年、六合館。
2. 一九三三年、西東書房。
3. 一九四四年、全国書房。(古典索引叢刊3)
4. 一九六七年、臨川書店。(増訂版)
5. 一九九三年、團結出版社。(『辞書集成』第12・13冊)

2と5は、1の再複製である(複製本1・2は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている)。

この複製本1の再複製(2と5)のうち、現在は、4の京都大學文學部國語學國文學研究室編の複製本が版を重ねており入しやすいため、利用されることが多い。『日本国語大辞典第二版』『角川古語大辞典』とも、この臨川書店刊の複製本4に基づいている(5)。

2. 1. 一九一六年刊六合館の複製本

天治本『新撰字鏡』初の複製本1は、大正五年(一九一六)に、六合館から刊行された。

大槻文彦による「発刊ノ辞」巻頭は、左のとおりである。

新撰字鏡十二卷ハ僧昌住ガ醍醐天皇昌泰年間ニ撰セシ我國最古ノ

字書ニシテ國語學上稀ニ見ル貴重ナル典籍ナリ。此書中古湮晦シテ知ラザリシガ近世ニ至リ村田春海京都ノ書肆ニテ始メテソノ抄録本一卷ヲ得テヨリ凡古語ヲ論ズル學者ノ之ニ據ラザルハナシ。然レドモ其十二卷ノ完キモノ世ニ存スルカ否カハ知ラレザリキ。然ルニ京都ノ人鈴鹿連胤氏文政年中其天治年間古寫ノ零本二卷ヲ得、安政三年攝津ノ人岸田氏ノ同ジ天治古寫ノ本十卷ヲ蔵スルコト知ラレタリ。之ニ依テ十二卷ノ天治古寫本完備シテ昌住ノ原著ノ面目儼トシテ今日ニ傳ハレリ。明治十三年ニ至リテ鈴鹿氏ノ本岸田氏ノ本共ニ東京帝室博物館ニ獻納セラレ現ニ同館ニ蔵セラル。

本書最初の複製本1刊行時、天治本『新撰字鏡』全十二卷は、東京帝室博物館の蔵本であった。

そして、複製本1の巻末に、大槻文彦の左の文章がある(一九三三年の複製本2では、「新撰字鏡刊行の顛末」と題される。傍線引用者)。

就テ着手セシニ原本ニ蝕處ノ甚ダ多キヲ見出シタリ。然ルニ故木村大人ノ安政年中ニ影寫シ置カレシモノ蝕處ノ數遙ニ少シ。蓋シ今ノ原本ノ蝕處ハ多クハ安政ヨリ明治十三年博物館獻納ニ至ルマデニ生ジタルモノト見エタリ。因テ木村大人ノ嗣子正氏ニ影寫本ヲ借りテ原本ノ蝕處ノ大部分ヲ補写スルコトトセリ。但シ木村本ニモ往々誤写アリ。是等ハ原本ニ據テ正シ、又博物館御蔵ノ雙鉤本ニヨリテ正スコトヲ得タルモアリ。又卷四ノ如キハ原本ノ紙面變色甚シクシテ撮影三回ニ及ビハジメテ製版スルコトヲ得タリ。非常ナル手数ヲ要シタレド(是等ノ事ニ就テハ知友山田孝雄氏其勞ニ服セラレタリ)。原本ノ真面目ヲ全ウスルコトヲ得タルハ主トシテ木村大人ノ賜ナリ。

すなわち、最初の天治本『新撰字鏡』複製本は、原本の虫損が進ん

でいたため、安政六年の木村正辞転写本を参照して補写されている。また、この木村正辞転写本の誤写を、「博物館御蔵ノ雙鈎本」に依って正したと言う。したがって、2以下の複製本が基づく一九一六年刊六合館複製本1には、複製者の補筆が入っている。その具体例は、天治本『新撰字鏡』原本と複製本1とを比較することで知られる。

2. 2. 木村正辞転写本

木村正辞転写本「安政六年八月戊戌朔欄齋木村正辞識」の奥書は、一九一六年刊六合館複製本の巻末に引用されている。それに先立って翻刻される「安政二年乙卯十有二月 中臣朝臣連胤」「安政四年丁巳二月」「安政五年秋七月下旬 藤原春村」の本奥書も、木村正辞転写本に存するものである。

この「安政六年八月戊戌朔 欄齋木村正辞識」奥書を持つ天治本の転写本は、現在、大東急記念文庫に所蔵されており(43函39架502番)、所定の手続きによって閲覧できる。

2. 3. 東京国立博物館蔵雙鈎本

『国書総目録』には、東京国立博物館蔵『新撰字鏡』として、「享和三版(考異を付す、二冊)」しか登録されていない。

東京国立博物館に問い合わせたところ、「『新撰字鏡』(博物館御蔵ノ雙鈎本)は、「新撰字鏡 小平狭山摸写」かと思われます。また、当館にて所蔵しております。」との御回答をいただいた(二〇二三年九月二一日)。ただし、状態が悪いため、撮影・閲覧とも不可能という回答であった。

二、天治本『新撰字鏡』原本と複製本との相違点

1. 『新撰字鏡篇立』巻頭の五十音図

国書データベース公開画像または原本を見て先ず気づくのは、『新撰字鏡篇立』の表紙に続く「法隆寺／一切経」墨印が押された遊び紙(<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100290337/6?In=ja>)の上には、醍醐寺蔵『妙法蓮華経积文』の表紙見返書込等で知られる「軽重清濁依上字／平上去入依下字」の文言(6)が朱で書かれている。後筆であることが明らかなたため、複製本では省略されたものである。しかし、仮名字体は古体を留め、「ア中(右傍)イウエヲ」「ヤ中ユエヨ」「ワキウヘ(左傍エ)オ」とあって、五十音図の歴史上、注目すべきものである。

2. 天治本『新撰字鏡』原本および公開画像で見える本文

複製本では見えない文字が、公開画像では読めるものがある。左に若干例を挙げる(以下、国書データベース公開画像を「原本画像」、六合館複製本1の影印を「複製本」と呼ぶ)。

○原本画像 複製本(32-19ウ8)



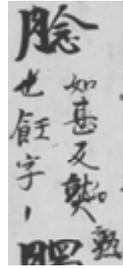
右の原本画像では、「反切下字「遙」が判読可能である。

○原本画像 複製本(33-10オ1)

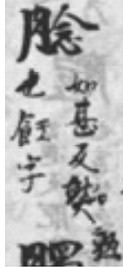


原本画像であれば、反切の下「迹」を推読可能である。

○原本画像



複製本 (40-13ウ5)



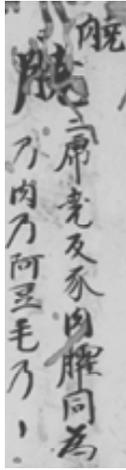
注文最後の「、(也)」が複製本では消されている。虫損と判断されたのであろう。次行「・(補各反/脅、(也))」(40-13ウ6)の「、(也)」も、複製本では消されている。

3. 天治本『新撰字鏡』原本および公開画像で見える符号

右のごとく、天治本『新撰字鏡』には虫損が多いため、複製本ではそれが目立たないように処理されている。その際、行間・欄外等への書き込みの挿入箇所を示す補入符や、順序を入れ替える転倒符などに、消されたものがある。たとえば、次のような例である。

3. 1. 補入符

○原本画像



複製本 (39-13才7)



右では、「脛」の上に補入符を書き入れ、右傍に肉月の異体字を補入した上で、注文最初に「二」を書き足している(二虎堯反豕肉臙同爲/乃肉乃阿豆毛乃)。複製本では補入符が消されたため、「二」の意味が不明となっている。

○原本画像 (301五20才2)



原本画像 (301五20才3)

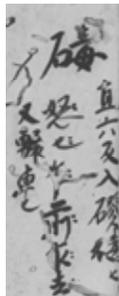


原本には、2行目「壘」の注文下に、次行頭「壘」(異体字)を挿入する意味の符号「—○」が存する。これが複製本では見えない。この補入符が無いと、字体注の意味が不明となる。

○原本画像 (312五25ウ3)



原本画像 (312五25ウ0)



右は、本行補入符は複製本でも見えるものの、紙右端に記入された四字一字目左の補入符(—○)が複製本では見えない。そのため、何を補入するのかが判然としない。

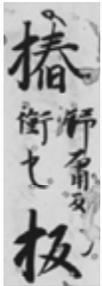
なお、複製本3までは見え、複製本4では消えている補入符も有る。
複製本1
複製本4 (40-13ウ1)



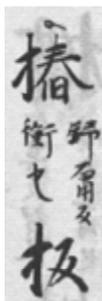
右のとおり、利用者が多い複製本4では、補入符の—が見えない。

3. 2. 転倒符

○原本画像

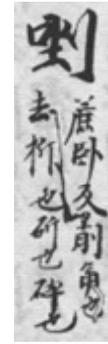
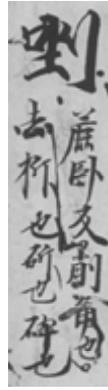


複製本 (590-12ウ8)



右は、複製本で対応する転倒符が消えた例である。「扳」右の転倒符が消されたため、「椿」の上に何が入るのが不明となった。

○原本画像



複製本(670-11-17ウ8)

原本の補入符に従えば、注文は、「匱臥反去折也削角也斫也碎也」となる。ところが、複製本では注文「削角也」下の補入符と「斫也」右の線が消えているため、補入符記入者の順序変更指示が伝わらない。補入符記入者は、「剗」の注文として、「折」の次に、『玉篇』注文「去芒角也」に当たる「削角也」を挙げようとしたものである。

以上、若干例を挙げた。なお、複製本1では見える転倒符が現在最も多く使用されている複製本4では見えない例も存するため、注意が必要である(7)。

3. 3. 見消符

見消(みせけち)符号も虫損に見えたためであろうか、複製本で消された例が有る。

○原本画像



複製本(17-1-2才1)

原本は、「畢」を見消とし、「竟」に訂正している。この箇所は、大東急本・享和本・群書類従本の抄録本も、「畢」ではなく、「竟」である。「複製本」では見消符が消されたため、「畢」と「号」との間に「竟」が挿入されているように見える(8)。

○原本画像

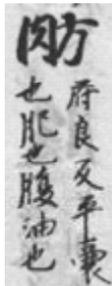
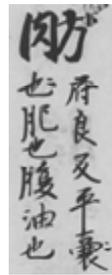


複製本(19-1-3才1)

右の「讀」は、原本で見消にされている。複製本4の頭注にも、抄録本との異同としてこれが記されている。しかし、天治本でも見消文字を除けば、抄録本と同じ「而至及讀皆同也」の本文となる。

○原本画像

複製本(34-1-10ウ6)



「肪」に「囊也」の注は合わない。前行「脬」の注文「尿管也」の影響であろうか。原本では、注文の「囊也」を消している。

以上のごとき例が存するため、原本画像を併せ見る必要がある。

4. 天治本『新撰字鏡』原本および公開画像で見える訓点

天治本『新撰字鏡』に記入された和訓は早くから注目され、抄出本も作られた。また、複製に際して、山田孝雄『新撰字鏡攷異』(一九一六年、六合館)の「新撰字鏡索引」、『新撰字鏡国語索引』(古典索引叢刊第4、一九五八年、京都大学文学部国語学国文学研究室)で、蒐集・整理もなされた。

山田孝雄「新撰字鏡索引」は、「和訓ヲ天治本享和本ニ通ジテ纂メ五十音順ニ排列シタルモノ」であり、「片仮名ニテ天治頃ノ人ノ加ヘシ訓」も対象となっている(「例言」参照)。ただし、「和訓」を対象とする索引であるため、「色」(153三2才7)のような字音は、対象外である。最初に挙がる片仮名和訓は、「誘」(172三11ウ8)の

「アサムク」である(左の画像、参照)。

この山田「新撰字鏡索引」や京都大学文学部国語学国文学研究室「新撰字鏡国語索引」・同『天治本享和本新撰字鏡国語索引』(増訂再版、一九七五年)は有益であり、活用されている(以下、特に区別する必要が無い限りこれら三本をまとめて「新撰字鏡国語索引」と呼ぶ)。

しかし、原本と照合すると、和訓の漏れや、判読の誤りが存する。以下、それを掲げる。

4. 1. 仮名訓注

○原本画像



複製本 (172三11ウ8)



原本画像では、「誘」の左に「コシ」「ラ」「口」が見える。観智院本『類聚名義抄』(法58頁6行2段)に「コシラフ」と掲出される訓である。これが複製本では消えているため、「新撰字鏡国語索引」にも採られていない。

一方、右訓「サソフ」下の「アサムク」の「ムク」は、現状では、補修紙のため、極めて薄く見える。木村正辭転写本は、「ムク」の「ク」の虫損を写す。複製本は、これを参照して、補写したものであろう。

○原本画像



複製本 (174三12ウ6)



「新撰字鏡国語索引」は、「誑」の左訓を「タラサス」とする。

しかし、原本画像から、「タラカス」であることが知られる。複製本は、左訓「カ」右肩の虫損が黒く映っているため、「新撰字鏡国語索引」は「サ」と判読した。

ただし、木村正辭転写本は、この左訓を写していない。他の転写本(宮内庁書陵部蔵本(11-1)、内閣文庫蔵黒川春村摸写本(208000)、京都府立京都学・歴史館蔵本、富山市立図書館山田孝雄文庫蔵本)においても写されていない。『日本国語大辞典第二版』は、一八六二年刊『色深狭睡夢』を「たらかす(誑)」の最古例としている。左訓「タラカス」は、原本でも判断できないものの、後筆の可能性が存する。

○原本画像



複製本 (十一才8)

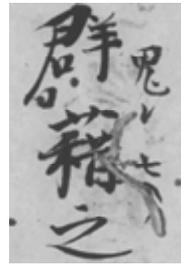


右例は、本書巻第十一の巻末「不空羼索神呪心経序」中の訓点である。これは、「不空羼索神呪心経序」の天治元年頃の訓点本として貴重であり、小林芳規『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究VI 伝承と伝播』(二〇一六、汲古書院)八二頁以降に訓点に、基づく訓読文が、訓点加諸本と比較して掲出されている(小林の訓読文では、旧所蔵に基づき「法隆寺本」と呼ばれている)。その小林の訓読文では、右の箇所には?を付して(リ)を補読している。

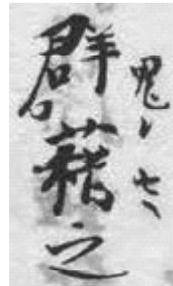
しかし、原本画像であれば、「受(け)タリ」の「リ」の残画が見える。

以下、「不空羼索神呪心経序」中の例は、小林の訓読文に反映されていない訓点を挙げる。

○ 原本画像



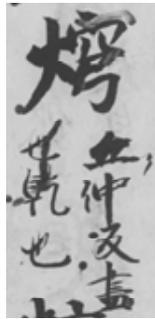
複製本 (十一ウ七)



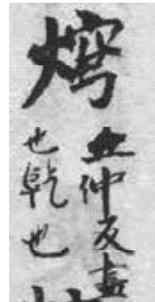
原本画像では、「藉」の下に「ノ」の残画が見える。

4. 2. 仮名音注

○ 原本画像



複製本 (56一21ウ7)



複製本では、反切上字「丘」の仮名音注「ク」が消えている。

○ 「燼」(649十一才二)は、複製本では、振り仮名が「エ」に見えない。原本画像を参照頂きたい。

4. 3. 声点

○ 原本画像



複製本 (584十九ウ7)



「抽」(チク)モトホル。複製本では、入声点が消えている。

○ 原本画像



複製本 (666十一15ウ6)



「割(上)去」。大東急記念文庫蔵『新撰字鏡』安政六年写本でも、上声点・去声点が見えている。しかし、複製本では、上声点・去声点とも消されている。

○ 原本画像



複製本 (593十四才8)



複製本では、去声点がつぶれ、認定困難である。

○ 原本画像



複製本 (719十一42才3)



右は、「不空絹索神呪心経序」中の例である。複製本では、去声点であることが判然としない。小林の訓読文でも、声点を認めていない。これが去声点であることは、原本で確認した。

○ 原本画像

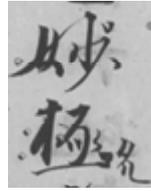


複製本 (720 十一 42ウ1)

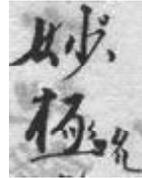


「極」には、上声点と入声軽点とが加点されている。入声軽点は、複製本のほうがむしろ確認しやすい。しかし、小林の訓読文で入声軽点は認定されていない。

○ 原本画像



複製本 (720 十一 42ウ7)



この「極」にも、入声軽点に加点されている。これも、複製本で認識可能であるものの、小林の訓読文には記載が無い。

○ 原本画像



複製本 (721 十一 43オ3)



「莫(入)晰(去)」と両字に声点加点がある。複製本では、「晰」への去声点加点が不審であるためか、これのみ削除されている。小林の訓読文には、両声点とも記載が無い。

○ 敦(平) (去) (正都) (平) 豚 (去) 反 (641 十一 3オ7)

右の字音点も、特に声点が複製本では不鮮明であるため、本項で指摘する。原本画像を「確認頂きたい」。

○ 「群(平) 藉(入) 輕」 (720 十一 42ウ7) (先掲) の「藉」には、原本画像でも認識が難しいものの、入声軽点に加点されている。この入声軽点は、原本で確認した。

一方、原本の虫損が声点のように見える例も存する。左に記す。

○ 原本画像



複製本 (721 十一 43オ1)



「所」字左下に平声点のごとく複製本に残っている点が生虫損であることは、原本で確認した。複製本は、このような虫損の大部分を見えないように処理した(9)。右は、その虫損が残った例である。そのため、小林の訓読文では、平声点と認定されている。

左二例も、その類例である(10) (傍線は引用者)。

○ 晏(烏) 安反亦作宴 (28 一 7ウ8)

「宴」左下虫損が、平声点のように見える。

○ ・(但) 洽反 (69 一 28オ2)

「洽」右下虫損が、入声点のように見える。

4. 4. 返点

○ 原本画像



複製本 (719 十一 42オ7)



複製本では、「捐」(返) 擲ケテ」の返点が消えている。

4・5. 待点

同じく、本書巻第十一巻末「不空羼索神呪心経序」の訓点に、待点（まちてん）と呼ばれる漢字左中央の点がある。

○原本画像



複製本（71十一42才8）



複製本では、「玄（に）會（せ）（返不トイフコト）待罔（し）」の「不」の左中央に打たれた待点が見えない。この待点は、「罔」に返る前に「不」を読むことを示す符号である。

5. 天治本『新撰字鏡』複製本で補われた本文

5. 1. 巻第四の変色箇所・欠損箇所

複製本1に大槻文彦が「巻四ノ如キハ原本ノ紙面變色甚シク」と記したとおり、国書データベースでの公開画像191〜221までの巻第四は、全巻の下部が大きく変色している。濁水を被ったものであるか。この色の差が出ないようにするため、「撮影三回」に及んだという。

この巻第四には、複製に当たつての補筆も比較的多く入れられている。たとえば、巻頭三行目下「食部」に続く文字や四行目・五行目末が原本画像では全く見えない。それが複製本では、左のように補われている。

○原本画像

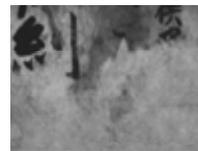


複製本（209四1才8）



また、巻第四2才3行目最下に「終」が有る。これと、次行の注文も、現在の書陵部蔵原本では見えない。

○原本画像



複製本（211四2才3・4）



これらは、木村正辭転写本では、複製本1のごとくに転写されている。複製本1は、これに依つて補われたものであろう。以降も、同様である。

なお、本巻は、複製本4の253頁・二三丁以降、見開き中央下部が欠損している。この部分も木村正辭転写本では本文が写されている。複製本は、この箇所の本文も木村正辭転写本に基づいて補っている。

5. 2. 巻第四以外の欠損箇所

巻第四以外の巻においても、虫損箇所等を複製本が補写したため、原本と複製本とが異なっている。その具体例の若干を記す。

○原本画像



複製本（358六20ウ7）



原本で、「□也」は、「禪」の左下に記されている。複製本では、「止千反」のすぐ隣に「也」のみ記される。虫損の□は、木村正辭転写本においても虫損として写されている。

このような天治本『新撰字鏡』の虫損は、全巻に亘る。特に、巻第七以降の虫損はおびただしい。

天治本原本における右のごとき変色・欠損を、現複製本は、木村正辞転写本および東京国立博物館蔵雙鉤本に依って補写している。ただし、木村正辞本および東博本は転写本であるため、写す際の誤りは免れない。現複製本は、そのような両本に基づく複製本編者の補筆が含まれていることに、複製本利用者は注意しなければならない。

三、むすび

以上、『新撰字鏡』天治元年写本の原本とその複製本との相違点を明示し、本書活用上の注意を喚起することを目的として、紙幅の許す範囲で具体例を掲げた。

現代を生きる我々は、本書複製本を作成・公刊してくださった先人の御苦労に感謝し、原本画像を利用できる幸福を享受しつつ、言葉の大海を渡ることができる。

注

- (1) 『天治本享和本新撰字鏡国語索引』（一九五八年、臨川書店）の所在表示に倣い、本稿における用例所在をこのように示す。21は現在最も多く使用されている一九六七年刊・臨川書店複製本4の頁数である。これは、予定されていた索引検索のために複製本3（一九四四年、全国書房）に付された頁数を引き継いだものである。続けて、巻数・丁数・表裏・行数を示す。各巻の丁数は、一九一六年の六合館複製本が付した丁数であり、以後すべての複製本に引き継がれている。
- (2) 宮内庁書陵部図書課図書寮文庫出納係からお教え頂いた。
- (3) 国文学研究資料館からお教え頂いた。

(4) 宮内庁書陵部図書課図書寮文庫出納係からお教え頂いた。

(5) 『日本国語大辞典 第二版』「主要出典一覧」と『角川古語大辞典』「主要拠本一覧」に依る。なお、最新の複製本5は、縮刷本であり、摺りも良くない。

(6) この解釈については、佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（二〇〇九年、汲古書院）研究篇73頁以降、参照。

(7) たとえば、『篇立』の「数字部五十六百」（11篇立5才3）は、原本では転倒符によって「百五十六」に修正されている。複製本1・2はその転倒符を複製しているものの、複製本4では、「百」の右の転倒符が消えている。

(8) 大槻信『『新撰字鏡』の序文を読む―信州大学日本語学夏季セミナー講演記録―』（『信州大学人文科学論集』8―2, 二〇二一年九月）、参照。

(9) たとえば、左は、原本画像では、「辨」に平声点のような○が見える。

○原本画像 複製本（21四2才6）



複製本では、それが見えない。原本確認すると、虫損であった。

(10) その他、「期（略）阿比牟須比波加留」（32―19ウ5）の「須」の右横に虫損が残る例などがある。

（広島大学）